させずに新たな話題を出せるということは、視認性が関係するLINE上のやりとりの大きな特徴であると言える。また、今回の調査では、先行する発信における特定の語からの連想という形で、スムーズに他の話題をはじめている例も多く確認され、接続詞の使用以外にも、自然な流れで新たな話題をはじめる方略があることが示唆される。つまり、一度に進められる話題の件数に制限がなく、新たな話題がはじまる際に先行する話題を途切れさせることもなければ、不自然さが生じるおそれも低いLINEでは、展開の用法を持つ接続詞の使用は、それほど必要ではないと考えられる。

5. 結論

本発表では、LINEと実際の対人場面における接続詞について、調査を行った。その結果、LINEでは対人場面に比べて、接続詞の出現頻度が極端に低いことがわかった。また、調査結果や先行研究を踏まえ、用いられにくい「だから」や「で」及び用いられやすい「でも」を対象に検討し、前件から後件が順当に導かれる点で、順接や、並列関係を前提に持つ逆接の使用は必須でなく、文をまとめる上で添加も不要なことが多いことを指摘した。但し、納得を示す「だから」や、前提に因果関係を持つ「でも」など、省略できない用法を持つ語ほど出現する可能性を見出した。

LINEにおける全体的な出現頻度の低さについての考察としては、①やりとりにおける同時性の観点から、ターンあたりの発話量が減少し、文と文をつなぐ接続詞も少なくなること②視認性(=読み返すこと)の観点から、接続詞の減少の背景に簡潔にやりとりを進める必要性が関わることの2点を指摘した。更に、チャットの特徴である複数の話題の両立性から、先行する話題への配慮を示す「展開」用法を持つ接続詞の出現が必須ではないことにも言及した。

【用例出典】

国立国語研究所「日本語自然会話書き起こしコーパス（旧名大会話コーパス)」

【主要参考文献】

有賀千佳子（1993）「対話における接続詞の機能について-『それで』の用法を手がかりに-」『日本語教育』79/石黒圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198/石黒圭（2010）「講義の談話の接続表現」佐久間まゆみ編著『講義の談話の表現と理解』くろしお出版/石黒圭、阿保きみ枝、佐川祥予、中村紗弥子、劉洋（2009）「接続表現のジャンル別出現頻度について」一橋大学留学生センター紀要12/岩澤治美（1985）「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56/梅澤実（1999）「「ていうか」の使用心理から探る中学生の友人関係」『日本語学』18-14/岡本真一郎・多門靖容（1998）「談話におけるダカラの諸用法」『日本語教育』98/国立国語研究所（1955）『国立国語研究所報告8　談話語の実態』秀英出版/白井宏美（2016）「チャットにおける多者間雑談と二者間雑談 -日独比較の観点から-」村田和代・井出里咲子編『談話の美学』ひつじ書房/椙本総子（1993）「会話構成単位と談話標識との関わり-「じゃ」を手がかりに-」『日本語・日本文化研究』3 大阪外国語大学日本語学科/高橋淑郎（2001）「談話における接続詞「で」の機能」国語学会2001年度春季大会要旨集/蓮沼昭子（1991）「談話における『だから』の機能」『姫路独協大学外国語学部紀要』4 /三浦麻子・篠原一光（2002）「チャット・コミュニケーションに関する心理学的研究-ログ記録の解析にもとづく探索的検討-」『対人社会心理学研究』2 大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室//森田良行（1982）「第4章　語法各説Ⅱ　接続詞・副詞類各説」日本語教育学会編『日本語教育辞典』/山本貴昭（2004）「談話における接続詞「で」の用法-女性話者の談話を対象として-」広島大学国語国文学-」広島大学国語国文学会『国文学攷』18/Sacks,H.,Schegloff,E.A.,&Jefferson,G.（1974）A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation.,*Language*,50

複文構造からみた接続表現の分析

ー『太陽コーパス』におけるソレデ／デー

高谷由貴（大阪大学文学研究科博士後期課程）

1．南の分類による接続表現の分析基準

本発表は、南不二男による一連の複文研究を援用し、国立国語研究所の『太陽コーパス』に見られる接続表現ソレデ／デを分析するものである。ソレデ／デは先行研究においては、椙本（1994）浜田（1995）等、現代語の研究が主であり、ソレデ／デの歴史的変化に注目したものは見られない。また、ソレデ／デの相違として挙げられているのは、「因果関係」の有無であった。椙本（1994）における分析によると、ソレデ／デは近い意味をもつが、前件と後件が「因果関係」によって結ばれているか否かという点で異なるとしている（椙本（1994:（42-43））。「A ソレデ B」には「因果関係」を伴う場合と、伴わない場合がある一方で、「A デ B」は「因果関係」を持たない、としている。その理由として、デには指示語が用いられていないために、前件と後件を結びつける働きが弱まっていることが挙げられている。そのため、デは「因果関係」を表すことが無くなり、「事の成り行き」を述べたり、他の話題へ移ったりする際に使用されるとしている。

今回は、ソレデ／デがどのような後続文を導くか、その変遷を見るために、いわゆる南の分類を援用した。「因果関係」とされているものは、南の分類によればB類[1]である。話題の転換はD類であると考えられる。このように、後続文のタイプを南の分類によって分析することにより、ソレデ／デの歴史的変遷に関して新たな知見が得られる可能性がある。

分類基準は以下のとおりである。南（1974，1997）の説をまとめた田窪（1987）によるとA類からD類の特徴は以下のようになる。

（1）A＝様態・頻度の副詞＋補語＋述語

B＝制限的修飾句＋主格＋A＋（否定）＋時制

C＝非制限的修飾句＋主題＋B＋モーダル

D＝呼び掛け＋C＋終助詞

南（1997:89）による従属句の分類をまとめたものは以下の通りである。

（2）A類従属句：ナガラ（平行継続）、ツツ、テ1、連用形反復等

- ものごと自身、動き、状態、属性などが、抽象的かつ一般的に扱われている。
- 構成要素の範囲が最も限られており、主格のガ、場所や時を表す語が含まれない。

B類従属句：テ2〈継続・並列〉、タラ、ト、ナラ、ノデ、ノニ、バ、テ3〈原因・理由〉、～ナイデ等

- 主格／述語の関係の設定、肯定／否定、個別／一般、定／不定、実現／非実現といった判定、時間・空間的な限定がなされる。
- A類と違い、主格のガ・場所・時の修飾語などを含むとされている。また、

[1] 田窪（1987）では、ノデ・ノニをC類としている。

C類と異なり、主題のハや、「タブン・マサカ」等は含まれない。

C類従属句：ガ、カラ、ケレドモ、シ、テ4（主題のハ、陳述副詞等を含む）

- 情報内容に対する「主体」の「態度」に関するものであり、「態度」には、「行こう／行くまい」等の意志／非意志、「行くだろう」等の推量／非推量、疑問文等の疑い／非疑いなどが対立している。
- 内容の提示および内容に対する主体の関わり方をしめし、文の範囲にとどまらず、談話のレベルになるものもある。

D類：実際のコミュニケーション活動、そのコミュニケーションへの参加者にかかわるものであり、話し手がその「相手」に対して何らかの働きかけをするものとしている

- 特定相手／非特定相手、問いかけ／非問いかけ、要求／非要求、呼びかけ／非呼びかけなどを区別する。（南（1997:89））

A類の例には、以下のようなものが含まれる。ソレデ／デの後続文に、「金を取る」や、「足りる」等、補語や動詞が含まれるが、主格・時制・モーダル等は含まれない。

(3) 彼の隱れ島の上で火を焚くのです。 すると間違つた方へ梶を取つて、 暗礁へ乘揚げて大騒ぎを爲る、 其所へ此方から小舟で漕付けて仕事をする。 それで金を取つては、溜め／＼して大金持に成つた者が、 此御座岬には澤山ある。（1901　海賊村　江見水蔭）

(4) 上に御互に立て事を斷ずる以上は一局一部の利害よりは經濟社會一般に就て果して國立銀行を延期するの必要あるや否やを斷定すればそれで足りることゝ思ひます、 故に此事について…（1895 商業　著者不明）

B類の例には、以下のようなものが含まれる。主格のガ、時制が含まれている。

(5) 「生存競爭の外に愛情も信仰も無益だといふなら、一層一つ金色夜叉の間貫一になつてやるだけやつて見よ。それで尚不滿があつたら、その時は相語らう。」 その後彼れは終に來なかつた。（1909 社会の変遷と信仰問題　姉崎嘲風）

C類の例には、主題を含む以下のようなものを分類する。

(6) 當局者の手腕は此所にあるのだ、若しも有るだけの金の外には使ふ事の出來ぬ樣ならば、 大藏大臣などにはならぬが宜いのだ。 で、我輩は政府事業の繰延には異存は無いが、中止には大反對である。（1901　政府の新事業整理問題　金子堅太郎）

D類の例には、以下のようなものを分類する。疑問、要求といった相手へのはたらきかけを含んでいる。

(7) 『おどろき、梨の木、山椒の木だ。が、まあ兎も角もこの事件は、これで納まつたといふものだ。で、是から何うしなさる？』『どうするつて何うなのだよ？』（1925　長篇小説　鼬つかひ　国枝史郎）

調査の結果、ソレデには、いわゆるA類・B類に分類されるものが多く見られるのに対し、デにはC・D類に含まれるものが多く見られるという違いが観察された。また、A類にはソレデのみが含まれ、デの例は見られなかった。A類にソレデの例しか見られなかった一方、B-D類の例は、ソレデ／デともに見られた。

本発表は、第2節で調査の対象及び方法、調査結果を示し、第3節でその調査結果を分析し、第4節でまとめるという構成をとる。

2．調査対象及び調査方法、調査結果

本発表の調査対象は、国立国語研究所の『太陽コーパス』[2]におけるソレデ／デの例である。『太陽コーパス』の検索には、検索ツール「ひまわり」を使用し、文字列検索を行った。文頭ソレデ／デの例の検索の際は、「本文」を「それで」、「前文脈」が「。」で終わる、「後続文」「は」で始まらない、というようにそれぞれ指定し、その後手作業で「それでも」そ「れであるから」などを除いていく。「それで…」等、後に続く文脈がないものについても、今回の分析対象には含めない。

本調査の結果、判明したことを、二点に分けて2.1.と2.2.で述べる。一点目は、年次ごとのソレデ／デの使用数の経過、二点目は「南の分類」を援用したソレデ／デの分類である。二点目についての分析を第3節で行う。

2．1　文頭・文中に現れるソレデ／デの使用数の変化

年代ごとのソレデ／デの用例数を調査し、表1・表2にまとめた。各年のソレデ／デの使用数の傾向を述べる。

表1　文頭に現れるソレデ/デ

	ソレデ	デ
1895（明治28）年	4	0
1901（明治34）年	20	36
1909（明治42）年	59	72
1917（大正6）年	87	46
1925（大正14）年	98	102
合計	268	256

表2　文中に現れるソレデ／デ

	ソレデ	デ
1895（明治28）年	54	17
1901（明治34）年	125	17
1909（明治42）年	138	20
1917（大正6）年	91	5
1925（大正14）年	112	6
合計	520	65

表1の文頭における使用に関しては、1895年には、デの例がほとんど見られないことが分かる。しかしながら、デの使用が見られはじめる1901年からは、デの使用数がソレデを上回っている。1917年のみソレデの使用が多いが、それ以外の年は総じてデがソレデを上回っている。文頭の例についていえば、デの方が後から使用されるようになったにもかかわらず、使用数がソレデを上回る年が多いことが分かる。

対して、表2の文中の使用に関しては、デの使用が1895年に既に見られるが、年代が下るにつれて使用数が減り、総じてソレデに比べて使用数は少ない。

[2]太陽コーパスは、明治大正期に最もよく読まれた雑誌『太陽』（博文館刊）を資料とした、本格的な日本語コーパスである。『太陽』の1895・1901・1909・1917・1925年の約1400万字の全文を収録している。また、品詞情報は付与されていないものの、文体、ジャンル等の言語情報が付されている。各年の記事数・文字数はほぼ同量になっている。

以上、『太陽コーパス』におけるソレデ／デの使用数の経年変化について見てきた。本調査の結果を見る限りでは、文頭・文中のデについては、使用され始めた時期が異なる可能性がある。これについては本発表ではこれ以上は言及しないが、今後の調査課題としたい。

２．２　「南の分類」によるソレデ／デの分析

太陽コーパスにおけるソレデ／デの例を用いて行ったことの２点目は、「南の分類」におけるソレデ／デの分類結果を示すことである。

前述の基準に基づき分類した結果、文頭・文中ともにA類の例はソレデのみが分類され、B類の例にはソレデが多く、C・D類の例にはデが多く含まれるという結果となった。

調査結果を表にまとめたものを以下表３示す。各類において割合がより高かったものを太字で示している。これにより、ソレデ／デの後続文の要素が異なる傾向を見せていることが分かる。A・B 類については割合[3]においてソレデがデを上回っており、C・D 類については逆に、デの割合がソレデを上回っている。

表 3「南の分類」による文頭のソレデ／デの分布

ソレデ	A	B	C	D	総計
1895(明治 28)年	0	2	2	0	4
1901(明治 34)年	2	6	12	0	20
1909(明治 42)年	0	24	35	0	59
1917(大正 6)年	3	37	45	2	87
1925(大正 14)年	5	36	57	0	98
合計	10	105	151	2	268
割合（%）	4	**39**	**56**	1	100

デ	A	B	C	D	総計
1895 年	0	0	0	0	0
1901 年	0	10	25	1	36
1909 年	0	12	60	0	72
1917 年	0	9	33	4	46
1925 年	0	22	60	20	102
合計	0	53	178	25	256
割合（%）	0	**21**	**69**	10	100

表 4「南の分類」による文中のソレデ／デの分布

ソレデ	A	B	C	D	総計
1895(明治 28)年	10	23	17	4	54
1901(明治 34)年	29	59	35	2	125
1909(明治 42)年	36	67	32	3	138
1917(大正 6)年	43	31	16	1	91
1925(大正 14)年	44	42	22	4	112
合計	162	222	122	14	520
割合（%）	**31**	**43**	23	3	100

デ	A	B	C	D	総計
1895 年	0	5	12	0	17
1901 年	0	6	11	0	17
1909 年	0	5	15	0	20
1917 年	0	3	2	0	5
1925 年	0	0	4	2	6
合計	0	19	44	2	65
割合（%）	0	**29**	**68**	3	100

続いて表４は文中のソレデ／デの例を「南の分類」によりまとめたものである。表３と見比べると、ソレデのA類の使用数について、文頭のソレデよりも割合が高くなっていることが分かる。個別の例の分析については次節で行う。

[3] パーセンテージは小数点第２位以下を切り捨ててある。

３．分析

３．１　A類（ソレデ／＊デ）

A類の特徴としてまず指摘できるのは、文頭・文中のいずれの場合も、デの例が見られないことである。ソレデのみ、文頭の例は10件（4%）、文中の例は162件（31%）であった。文頭のソレデの例は毎年数件しかないのに対して、文中の例はそれぞれ、1895年から10件、29件、36件、43件と、年を追うごとに増えているのが特徴である。

次の例のように、ソレデ／デの後続文に「金を取って」「足りる」等の補語・動詞が含まれるものをここに分類している。

(8) 彼の隱れ島の上で火を焚くのです。すると間違つた方へ梶を取つて、暗礁へ乘揚げて大騷ぎを爲る、其所へ此方から小舟で漕付けて仕事をする。それで金を取つては、溜めして大金持に成つた者が、此御座岬には澤山ある。其家筋は二三軒、未だに遺つて居るとか云ふ事です』　（1901　海賊村　江見水蔭）

(9) 上に御互に立て事を斷ずる以上は一局一部の利害よりは經濟社會一般に就て果して國立銀行を延期するの必要あるや否やを斷定すればそれで足りることゝ思ひます、故に此事について…　（1895　商業　著者不明）

A類の用法はなぜ、ソレデにのみ見られるのであろうか。(8)(9)のソレデは、「金を取る」「足りる」ことの「手段・方法」という意味で述語と強く結びついている。このため、A類のソレデはデと置き換えることは不可能であると考えられる。

３．２　B類（ソレデ／デ）

文頭のB類の例はソレデが105例（39%）、デが53例（29%）と、文中のソレデは222例（43%）、デは19例（29%）ソレデの方が多く見られた。ソレデ／デともに、用例が全ての年代に見られた（デは1895年以外の全ての年代）。文中のソレデの例に関してはこのB類に含まれるものが最も多かった。

B類は、ソレデ／デの後続文に主格のガ・場所・時制を含むものである。次の例の「近ごろ羽振が好いのだ」「給金が二十兩もらへました」のようなものがそれである。

(10) 『奴はネ、學生時分に養子に行つて、大學を卒業してから養家の財で洋行したのだ。たしか君の方の大臣とは縁類になつてる。それで近ごろ羽振が好いのだと專ら説がある。　（1901　丸之内　内田魯庵）

(11) 機織もさせます、 夜分は手習も教へてくれるさうで、 ありがたいと思つて居りますから、 主人が言ふ通りに最う二年おく事にしました。 それで給金が二十兩もらへましたので、 質入の屋敷を受け戻したのでございます。 家を作るにも二十五兩かゝりました。　（1909　国さん　太田玉茗）

(12) …掘り出すことがありますけれども、 皆な支那の鏡で、 日本の鏡はまだ一面も出たのを見ませぬ、 斯樣な譯でありますから、 それで鑄物が進んだならば、何にもかも進みさうなものだが、さうぢやない鏡は鑄たけれども支那の方が進歩して善かつたから…　（1895　仏教と美術との関係　黒川真頼）

この例の「それで鑄物が進んだ」も、(10)(11)も、ソレが「原因・理由」を意味しているという点が共通している。

次に、B類のデの例を挙げる。主格「私が」「此の考が」、時制「認められていた」等が含まれている。

(13) 私はお隣室へ退つて居りましたが、 三十分ばかりして奥さまから鈴が鳴りました。 で、 私がお部屋の戸を開けますと、 出會頭に旦那さまが急いで出ていらつしやいました　(1925　長篇探偵小説ハートの九　延原謙(訳)；ビ・エル・フアルジヤン(作))

(14) 一己の私事に亘らねばならぬ。『生起論』を讀んだ以來、 私は生物が進化するのは普通の再生の順序によるものと信じて居た、で 此の考が一般に認められては居たが併し誰一人これを確實にする程の證據を提示した者はなかつた。
(1909 ダーウィンとウォレース　中島孤島)

3．3　C類(ソレデ／デ)

C類の例は、文頭の使用がソレデ・137例(56%)、デ・178例(69%)で、各々用例の半数以上がこれに含まれた。これに対し、文中の使用は、ソレデ・122例(23%)デ・44例(68%)と、割合としてはデの方が多い結果となった。C類の例の割合は、文頭のソレデ／デ、文中のデの中で最も多かったが、唯一文中のソレデに関しては、C類の例よりもA類、B類の割合の方が高くなった。C類の例は以下のように、ソレデの後続文に「私は」等の主題を含む。

(15) 出でゝ空氣中に混じると云ふのです、これが甚だ恐るべきものでありまして、咯啖のみなれば始末し易いけれども此方は豫防が一層困難であります。それで私は、患者に對して勸めるのには、啖嗽や噴嚏を致す時には可成空氣を汚がさぬ樣にし、傳染の途を防ぐ爲めに、 消毒したる「ハンケチ」又は消毒･･･
(1901　家庭と肺病　石原笠軒)

次の例では、ソレデの後続文に「最もよいのは」、デの後続文に「私の考へでは」などが続くためC類に分類している。

(16) …植物性の食物は、比較的經濟である、けれども、 人の各自の身体の状況によりては、さういかない場合が澤山ある、それで、最もよいのは、混食であつて、之がまた普通である、そして、各自の身体の状況によつて、一方を増し、一方を減ず…　(1901　食物と野菜　石原笠軒)

(17) …云ふ部類に屬する、 此等の學問は自然の作用自然の働きを説き明す學問であるから、 先づ説述學と云ふ名を附けて置きました、 で私の考へでは學問と云ふものは此の二つの外ないと思ふ、 世に學問と云ふ名を隨分種々なものに使ふです、或は航海學…　(1895　歴史は科学に非ず　田口卯吉)

前節文の内容は「植物性の食物」についてであるが、後続文ではそれと関連した別の話題「最もよいのは、混食であって」へと移っている。

(18) 質素な着物を着て、 男性が、 却つてぎらぎらした、 目に着く着物を着て居た。で、古い帝國時代のイジプトでは、女性の服裝は、男性に比べて、 恐ろしく單調な…　(1925　女性の男性化、男性の女性化　千葉亀雄)

上の例は、「男性が…着ていた」という前節文の内容を前提にして、「で、古い帝國時代のイジプトでは、…」という新たな話題へと移っている。

このように、上に挙げたC類の例は、先行研究で指摘されてきた話題の転換の例に相当すると言える。

ここまでのA-C類と判断した例は、後のD類との違いとして、その例文のジャンルが広い傾向にあった。D類の例文が主に小説・戯曲から出たものであるのに対し、A-C類の例文は、元の記事が小説にとどまらず、家庭や政治の問題を扱った評論も見られた。「南の分類」とジャンルの関連については、今後も詳しく見ていくこととし、本発表では指摘に留めておく。

3．4　D類(ソレデ／デ)

D類の例は文頭が、ソレデが2例、デが25例と、C類と同じくデのほうが多い結果となった。ソレデに関しては2例のみが該当し、それぞれ戯曲と小説の会話の例であった。文中の例はソレデが14例、デが2例で、それぞれ全体の3%にとどまる。

(19) 兄さん。 この事はまだお母さんにも御相談してないのですが、 あの……あたしよく～～考へた結果なんですが……　義一郎。 ふむ。 それで、どうしてくれと云ふんだい。　はな子。 あたしに結婚をゆるして頂けますまいか。
(1917　戯曲　生きんとすれば　長田秀雄)

(20) れとだれがあたつたのなら？』 これにはわたしも尠なからず驚いたのである。『二見さんと吉さんよ。』 『おや！吉さんもなんなはつたのか。 それで おとつさんはなへ來ならなんだのやろ？』 『さア……わしも知らんが、 たいて吉さんの方に氣兼ねをしなつたのやろが･･･　(1925　清き一票　坂本石創)

ソレデ／デの例いずれも、D類の例は、前節文の内容を受け継ぐことなく、別の内容に移る際に用いられているものが多く見られた。

(21) ･･･方針、方法によつてるのだ。春海　尊大人の高徳はよく承知してゐる。で、君一身及び家庭――いや、これも謂はゞ形式的の質問だが、――君の家庭にもまだ僕の知らない弱點はあるまいな？　(1917　社会劇　都へ　坪内士行)

(22) ･･･發明の祕密だけは保證してくれるだらうね？』 『もちろんさ。 で、その相談といふのは、 どんなことだい？』 『ハアバート、 君は今の･･･
(1925 ラヂオと犯罪　延原謙)

上の例では、「發明の祕密だけは保證してくれるだらうね？」という質問に対して「で、その相談といふのは、 どんなことだい？」と、話を先へ促している。

先行研究では「因果関係」がうすくなり、話を先へ進める機能を持つようになったと説明されていたものが、このD類に当たると考えられる。D類のデは、文頭のものが25例、文中が2例見られた。1901年が1例、1917年が4例、1925年の例が20例（文中の2例を含む）で、1909年のものは見られなかった。また、デ27例のうち、小説と確認できた例は20例、戯曲の例は3例であった。小説・戯曲の例は会話がそのすべてを占めている。

4．おわりに

本調査の結果、A類に含まれる例は、ソレデのみであることが分かった。そして、その理由として、ソレデが「手段・方法」等の意味で述語と強く結びついていることを指摘した。そのため、A類のソレデは、デと置き換えることは不可能であると考えられる。A類に含まれるデは見られない一方、B類・C類になるにつれてデの割合が上がるという傾向が見られる。ソレデは全ての分類に用例が見られるのに対して、デの例はB－D類の用例のみが見られる点、そして、1895年時点の文頭のデの用例が見られず、その後デの使用が増えた点を踏まえると、ソレデの機能の一部がデとして使用され始めたという予測が成立つ。これについては他の資料も精査する必要があると考えられるため、今後の課題としたい。

D類については、文頭・文中合計してもソレがデ16例、デが27例と、他の分類に比較して少数であった。また、1925年の例が多い点もその特徴である。D類は他の分類の例と異なり、小説の例がその8割近くの20例を占めていた。

このように、「南の分類」を援用することで、ソレデ／デの後続文のタイプの違いを観察した。今回見られた傾向が、他の時代においても共通するのか今後調査したい。

【参考文献】

椙本総子（1994）「談話標識の機能について　－ソレデ・デを中心として－」『日本語・日本文化研究』2, 33-44, 京都外国語大学.

田窪行則（1987）「統語構造と文脈情報」『日本語学』6－5，37 - 48，明治書院.

浜田麻里(1995) 浜田麻里（1995）「サテ、デハ、シカシ、トコロデ　—転換の接続語—」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』，600-607，くろしお出版.

南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店.

————（1997）『現代日本語研究』三省堂.

【辞書・コーパス】

国立国語研究所編（2005）『太陽コーパス　雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社.

前接要素にみる「気がする」の意味変化

藏本真由（関西大学大学院生）

1. はじめに

本発表は、「気がする」という述語表現が、近代以降に認識的モダリティ形式として文法化（grammaticalization）を進めてきたことについて明らかにするものである。

『日本国語大辞典 第二版』(2000-2002)では、「気がする」は「ある種の気持を心に感じる。心持がする。」と記述されており、収録された明治期の用例(1)(2)をみると、「気」を「気持ち」に置き換えられることから、当時の「気がする」は「気」の語義である「感情。気持。気分」の意味を維持した述語表現であったと思われる。

(1) 明暮其なかの好いのを見て居た吾は、ええ、これ、何んな<u>気がした</u>とお前は思ふ
（泉鏡花(1895)『夜行巡査』）

(2) 成程と首肯いて読んだ当時を憶ひ出して、ただ其当時に立ち戻りたい様な<u>気もした</u>
（夏目漱石(1910-1911)『思ひ出す事など』）

しかし、現代に見られる(3)(4)のような用例では、「気」を「気持ち」に置き換えることは難しく、一方で「ヨウダ」や「(～シ) ソウダ」などの認識的モダリティ形式に置き換えることは可能である[1]ことから、「気がする」の用例が見られるようになった当初と現代とでは「気がする」の用法に差があると考えられる。

(3) この間より、ちょっと大きくなった｛気がする/ヨウダ｝。
（松りんこ(2003)『誰よりいちばんっ！』）

(4) 目を閉じて聞いていると、「カヤカベ」の信仰の歴史をよりつよく実感｛できる気がした/デキソウダッタ｝。（五木寛之(2001)『日本人のこころ 2』）

形態的な面でみると、(1)(2)の用例では、「気がする」の前接要素が「～ナ」の形をとる名詞修飾形式であるのに対し、(3)(4)の用例では動詞が直接前接していることからも、「気がする」が認識的モダリティ形式として機能するようになってきていることがわかる。

「気がする」について取り扱った先行研究に、1970年前後の小説や随筆、座談会録等を調査した島本(1977)があり、「気がする」の用例の多くが前接する述語用言との間に「ヨウナ」「トイウ」という様態・引用表現の名詞修飾形式（以下、様態・引用形式）を介することが指摘されている。表1は、島本(1977)の調査結果を発表者が整理したものであるが、前接する述語用言に動詞が多いこと、そのほとんどが様態・引用形式を伴うことがわかる。

[1] ただし、「気がする」は話し言葉的なくだけた文体に用いられやすく、硬い書き言葉的な文体にはそぐわない。その点で、(3)(4)で「気がする」を使用している元の文と、「ヨウダ」「(～シ) ソウダ」に置き換えた文とでは、文体的な印象は異なる。